

エロ漫画にいたような童貞に優しい女に
 ならうと性転換したら幼馴染を好きに
 なってしまった心まで雌に堕ちる話

もちもち堂

エロ漫画にいるような童貞に優しい女になろうと性転換したら幼馴染を好きになっちゃってしまい心まで雌に堕ちる話

21世紀

科学の進歩により人類は性への自由を手に入れた。

昨日まで男だった者が今日は女になっている。そして、その逆も然り。そんな風景がありふれた世界。

各々が自らの性を好きに選べる時代なのだ。



「…そう、だから俺が女になっても何も
おかしい事なんてないんだよ、亮！」

「何で自信満々なのか知らないけど僕たち
くらいの年なら、まだ親に相談してから
するのが普通だからね」



「いきなりオバサンから息子が女になっただって呼び出される僕の気持ちわかる？」

「しかも驚きすぎて未だにオバサン気を失っているし」

「ふんっ！母さんは時代遅れなんだよ。今はこんなの普通だっていうのに」



「はあ…まあ凜音が突拍子もない
ことをするのは、いつものことだし
もういいよ」

「で、何の目的で女になったの？
流石に何の理由もなしにこんな
ことするなんて思えないしね」

「ふふ♪よくぞ聞いてくれた！」



「俺はな…エロ漫画に出てくるような
童貞に優しい女の子になりたいんだ!」

「……は?」

「本当はなりたいたいっていうよりもそういう
娘に会いたかったんだけど…現実には
そんな娘は全然いなかったんだけどな」

「男から女になった奴らも、体に心まで
引っ張られたのか、いつの間にか普通の
女のようになってやがってさ…誰も俺の
頼みを聞いてもくれないんだ」



「何処を探しても理想の女の子なんて
いなかった…けど、俺は気付いたんだ!!」

「いないなら俺がそれになればいいって!」



「だから凜音が女になった、と…」

「ああ！そうだ！」

「分かるか？今、童貞の…いや、俺たちの夢が叶おうとしているんだ！」

「取り合えず、お前が考え無しなのはわかった。…いや、考え無しなのは、いつものことだったな」



「まあ、戻ろうと思えばいつでも戻れる
んだろうし、とやかくは言わないよ…」

「それじゃあ僕はもう帰るからな…
あんまり変なこととしてオバサンを
心配させるなよ」

「…え、あ、おいつ!」



「……………」

「あいつ本当に帰りやがった。

…たく！ロマンの分からん奴め」

（せっかく幼馴染の童貞野郎に女体
の実験に手伝わせてやろうと思った
のに、なんて友達がいのない奴なんだ）

（…まあ、何だかんだで、いつでも最後
には隣にいてくれるし良い奴なのは
間違いないんだけど）



何故かあいつの顔を思い浮かべると
少しドキドキと胸が鳴って妙に下腹部
がムズムズする。

これも女になった影響なのだろうか？

「……取り合えずやることもないし
女の体というものを色々と経験
してみるか」



「自分の体触るだけなのに、何か緊張するな。女の体でオナニーするなんて初めてだからかな？」

いつの間にかに湿っていた秘所に手を伸ばしゆっくりと確認するように指を這わす。

ビクッ

んんん

フーッ

んんんんん





「んっ…♡は、あっ♡なんだ、これ…っ♡」

軽く触れただけだというのに俺の体は
びくりと跳ね上がり、今まで感じたこと
のない快感が背筋を走る。

ビクッ

んっ
ビク

フー
フー

んっ
んっ
んっ

さわ
さわ



「はあ…あ♡あああ♡んく、うっ♡」

「あ、う…っ♡指で少し弄ってるだけ
なのにとんどんエッチな汁が溢れて
くる♡っ…あ♡おまんこくチュクチュ
するの気持ちいい♡」

んん

んん

んん

んん

んん

「すげえ…♡女の体ってこんなに
エロいんだあ♡これなら簡単に
男を誘えそうだな♪」

より強い快楽を求め、自分が男に抱かれて
いるところを想像しながら秘所を弄る。



興奮して来たのか口からは甘い吐息が漏れてしまう。男の時とはまた違った快感に俺は夢中になり手を止めることが出来なかった。

女の快樂という今まで知らなかった波が押し寄せると同時にぼんやりと輪郭が定まらなかった妄想の中の男の顔が亮のモノになる。



(は、あつ...!!何でこんな時、あいつの顔を思い出すんだよ俺は!)

意識してしまうと急に恥ずかしくなってしまうが、指は俺の意思を無視するように動き、止まってくれない。





(う、くうっ♡なんで俺、亮の
顔思い出しながら…っ♡)

「ひうっ♡ん、んっ♡あ、く…うっ♡」

ん

ん

ぐわ

ん

ん

ん

ん

(身体がビクビク震えて…っ♡あぁっ♡
無理…っ♡もう、イ、クう…っ♡)

この時の俺は。自分の口から出た淫猥な
雌声に気付くことも出来ず、押し寄せる
快楽に身を任せ激しく絶頂した。



「ふふ、ようやく届いたぞ!」

俺は綺麗に包装された箱からそれを…
『デイルド』を取り出す。

ついに買ってしまったそれを持ち、
まじまじと見る。…もちろん、コレを
買ったのには理由がある。



あの日…最初に女の体でオナニーをした
その日から、あいつの…亮の顔がちらつ
いて離れないのだ。

そのせいで亮と話していてもそれを
意識して、ギクシヤクしてしまう
日々を送ってしまっていた。

その事を忘れようと、他の男でオナニー
をしても、逆に悶々とした気持ちに
なってしまう。



（オナニーしてるときに毎回毎回あいつの顔が浮かぶのは好きだからとかじゃなくて、ただ単に身近にいる男があいつぐらいだから、だ……！）

（そうだ、そうじゃなきゃ、俺がこんな感情に振り回されるなんて……こんなのおかしい……っ）



俺は自分の理想の為に女になったのだ。
それが一人の男を気にして、まるで普通の女のように振舞うなどあつてはならない。

だから俺は考え、思いついた。

今のこの気持ちを消すには、あいつのことを思い出さなくらい、より強い
快樂で上書きすればいいと。



そしてその為にこれを買ったのだ。
……流石に、いきなり知らない相手
とするのは怖いしな。



「よし…やるぞ!」

服を脱ぎ、デイルドに跨ると、緊張を
振り払うように声を出し自分を鼓舞する。

僅かに震える体を誤魔化し、ローション
で十分に濡らしたデイルドを秘所に
押し当てると勢いのままに腰を落とす。



「うぐっ…!っ…あっ!ぐ、ぎいつ!」

メリメリと内側から裂けるような
感覚に苦痛の声が漏れてしまう。

準備不足で身体がまだ硬かったのか、
それとも物が大きすぎたのか、デイルド
は根元まで入らずに止まってしまう。



(ヤバい、ヤバい、ヤバいつ！
これっ、マジで痛いっ！)

(オナニーが気持ちよかったから、
これもイケるかと思ってたけど…
むりっ！…マジ無理っ！)

あまりの痛みに、何の為にこんな事を
しているのか忘れ泣きそうになっ
てしまう。



(うう…こんなじゃ、また亮に
呆れられる。ホント…俺なにしてい
るんだろうな)

情けなさで惨めになると同時に亮の
顔を思い浮かべたおかげか、痛みとは
別の…快楽という感覚が下腹部を襲う。

動かせなかったはずのそれは、秘所から
溢れた愛液を潤滑油に少しづつ奥へと
進む。

はぁ♡



(う、く…っ♡これって、やっぱり俺が
あいつを意識してるから体が反応して
るのか?)

ジンジンとした痛みはまだある。

だが、これがあいつのだと思うと
体が勝手に愛液を溢れさせてし
まうのだ。



(あああゝゝ！どうしよう、どうしよう！
俺はただ童貞たちに優しい理想の女に
なつて、色んな男たちとしたかっただけ
なのにつ！)

(…それなのに！何でこうも、あいつの
ことばかり考えちゃうんだよおゝ！)

(ああ…わかんない…わかんないけど、
亮でするオナニー、気持ちいいよお…♡)

はあ♡



「ひあっ♡う…くうっ♡」

意識すればするほど秘所は愛液を滴らせる。痛みも徐々に快感に塗り替わり口から艶やかな声が漏れてしまう。

はあ♡

ズル
ズル
ズル





あああ

「うっ、あぁっ♡だめ、だっ♡
気持ちいいの止まらないっ♡」
「あ…っ♡あ、くう♡お腹の奥、
おっきいのでいっぱいに…っ♡」
より深く、女の甘く痺れる快楽を
求め、腰が無意識に動いてしまう。

ズンズン





「はあ…はあ…♡んっ♡…これは
もう直接確かめるしかないよな…」

んっ

んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ
んっ
んっ

んっ
んっ
んっ

「え、なにこれ!? 呼び出されたから
来たけど、何でいきなり押し倒さ
れてるの僕!」

「いや、ちよつと確かめたいこと
があつてな。その為に少し協力
して欲しいんだ」



「……協力って」

「この状況で分からない
わけないよな」

「それにほら、チンコの方は
こんなに素直なんだからさ♪」

ドキ
ドキ♡

んんん
うー

じい
じい

はめ♡



「……童貞たちに優しい女になるんじゃないの?」

「それは一旦いい…って、それより…えっ! いや、お前童貞じゃないの!」

「…いや、童貞だけとさ」

驚愕の表情を浮かべる俺にバツが悪そうに顔を背け、頬を赤らめながら亮はぽつりと小さく言葉を零す。

フー

じい
じい

うぐッ



「…はあ。なんだよ、驚かすなよな」

てつきり彼女でもいるのかと焦り驚いて
しまった。

まあ、いつも一緒にいるんだし落ち着いて
考えれば、そんなのいないと分かりそうな
ものなのだが、如何やら俺もかなり緊張
してみたみたいだ。

俺は、はやる気持ちを落ち着かせようと
深呼吸をし覚悟を決める。

ハッ

はあ♡



「じゃあ、動くぞ」

下着越しに性器を合わせゆつくりと
擦るように動き始める。

布越しに感じるビクビクと脈打つ肉棒の
感覚に、むず痒いような喜びと焦がれる
ような期待感で胸が締め付けられる。

さあさあ

ビク

んん

うわ

はあ♡



「んっ♡は、あぁっ♡んく…っ♡」

肉棒にクリトリスが擦られるたび
今まで感じられなかった快感が
押し寄せる。

亮が相手だというだけでこうも
簡単に濡れてしまうのだ。

さあ、さあ、

んっ

びゅん

んっ

はあ♡



(やっぱり一人でするより
濡れ方が全然違うよな...)

(それに亮とするって思ったら
胸がすごいドキドキして張り
裂けそうで苦しい♡)

もう自分への誤魔化しは効かない。
俺は女として此奴のことが好きなのだ。

それを自覚してしまっただけからは
俺は自分を止められなかった。

さあさあ

はぁ

はぁ

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

「は、あぁっ♡おく、いつぱいに
入って…♡んっ♡んっ♡あぁ…っ♡」

愛撫で滾った肉棒を秘所へと押し当て
挿入する。待ち望んだ瞬間に体が震え
一つになれたことに喜びと幸福感で
満たされる。





「ひあっ♡あっ♡これ、すごいっ♡
は、あっ♡オナニ」なんかより全然
気持ちいいっ♡」

「んひいっ♡オマンコ勝手にチンコに
絡み付いていっっちゃうよお♡」

んんん
んんん

んんん

ズンズン

「う…く、うつー！」

「はあ…♡はあ…♡あ、はっ♡亮も俺の
オマンコ気持ちいいんだろ？チンコ
なかでビクンビクンって跳ねてるぞ♡」

イキそうになるのを必死に堪える亮が
可愛く、そして自分がその顔をさせて
いると思うと嬉しくなり腰の動きを
速めてしまう。

はあ♡
ビクン

あ
あ
あ♡♡♡

ズン
ズン



「ふぁ♡あつ♡あぁつ♡なな、チンコが
ゴリゴリあたって…っ♡すごいよ、亮♡
これ滅茶苦茶、気持ちいいっ♡」

「凜音っ、ま、ってっ！そんなに
激しくされたら、僕…っ！」

制止の言葉も聞かず俺は
快樂のままに腰を動かす。

はぁ♡
びゅっ

びゅっ

あぁ♡
あぁ♡

ズッ
ズッ



「つく! あ、あぁっ!」

びゅぶ、びゅぶるるるるっ!

膣内で肉棒が一際大きく震えると同時に
子宮内に熱い精液が叩き付けられる。

はぁ♡
びゅっ

あぁ♡
あぁ♡



「ん…あ、あっ♡お腹の奥にあっつい
のがビチャビチャ掛かって…」

「ご、ごめん！僕、我慢出来なくてなかに…」

「んっ♡大丈夫。ちゃんとピル飲んで準備
してたから。…だから、さ。このまま続けて
もいいよな♡」



「んっ♡ガチガチで一回出した
だけじゃ、まだまだ足りないだろ？」

「ほら、トロトロのオマンコに
チンコぶち込んでいいんだぞ♡」

「凜音、僕…っ！」

「俺も、さ。もっとして欲しいんだ。
…だから、な♡」

んっ♡
んっ♡

んっ♡

ドキ♡
ドキ♡
ハハハ♡

はぁ♡



愛液と精液でドロドロに湿った下着を横にずらし、お尻を振りながら挿入を促す。

その仕草はまるで発情した雌そのものだが俺も亮もそんなこと気にする余裕もなく今の俺たちは唯やる事しか頭になかった。

はぁ〜♡

ドキ♡
ドキ♡
ハ〜♡

はぁ♡



「あっ♡ああっ♡はあ…♡後ろから
チンコ、ズブズブ入ってきたあ♡」

「は、ああっ♡ゴリゴリ挟って…っ
んひい♡俺の中…っ♡奥まで広げ
られちゃうよお♡」

はあ〜♡

はあ♡

ドキ♡
ドキ♡
ハ〜♡
ハ〜♡



「ふ、うあ♡ひあつ♡乱暴に突かれて
掻き回されるの、気持ちいい♡♡
玩具なんかより全然いいよ♡」

余裕のないひたすら単調な動きのはず
なのにグリグリと肉棒を押し付けられ
るたび、体は喜びに震え口からは雌の
発情した嬌声が漏れてしまう。

いっ!
いっ!

んっ

ドキ
ドキ♡
ハハハ♡

はあ♡



(これ想像よりもやばいぞ…っ
亮とのセックス気持ちよすぎて
頭おかしくなりそう…っ♡)

(は、ああ…っ♡もう、好きなのに
もっと、好きになっちゃうよお♡)

(ダメだっ♡もう亮以外の
セックスなんて考えられない♡)

(俺もう、女になった目的なんて
どうでもよくなってる…っ♡)

いっ!

いっ!

あッ
あッ

んっ

ドキ
ドキ♡
ハハハ♡

はあ♡



「はあっ♡あ、あうっ♡あくうっ♡」

「後ろからガツガツ突かれて…っ♡
ふあっ♡ああっ♡これ、犯されてる
みたいで…♡あっ♡興奮する…っ♡」

「ふ、くうっ♡あ、ああ…っ♡敏感に
なってる、とこ、挟られて…っ♡」

いっ!
いっ!

んっ

ドキ
ドキ♡
んっ♡
ハッ♡

うぐッ



「これ以上され、たら、俺もう…っ♡」

媚びるような声で亮を求め、もっと欲しいと言わんばかりに腰を押し付ける。

そんな俺に応えてくれるように亮はより一層腰をぶつける。

はぁっ♡

ドキ♡
ドキ♡
ハハハ♡

はぁ♡

いっ!

いっ!

あッ
あッ



「はあっ♡はあっ♡あうっ♡
りよう…っ♡りよう…っ♡」

「り、お…っ♡」

少しでも亮に気持ちよくなって
欲しくて自分からも腰を動かし
ながら、膣を締め付ける。

あゝ
あゝ

いっ
いっ

ん
ん

ドキ
ドキ♡
ん♡
ん♡

はあ♡



「く、う…っ♡凜音、僕もう…っ♡」

「あはっ♡お腹の中でチンコびくびく
してるぞ♡もう出したいのか？」

「ふふ♡いいぞ♡俺もイきそうだから
このまま、一緒にいこう♡」



びゅぶ、びゅぶるるるるっ！

「おほおっ♡おおっ♡あっつい精液、
おくにドブドブ出されてるう♡」

「はあっ♡ああっ♡お腹のなか、
亮のでいつぱいにされてりゆう♡」

ビュンッ♡
ビュルルンッ♡

んん

ドキ
ドキ♡
んん♡
ハハ♡

うぐッ



精液が子宮に掛けられるたび絶頂し快感でビクビクと跳ね上がってしまう。

絶え間なく来る快樂の波と溢れ出るほどの精液を受け止めながら、俺は身体が一人の男の為に変えられていくような感覚に浸るのであった。

いっしょ♡

はぁ♡

ドキ♡
ドキ♡
ハハハ♡

はぁ♡



性転換したら今までの人間関係が変わると聞いていた。…ただ、ここまですごいモノなんて思いもしなかったのだ。

自分の中のあいつへの友情が徐々に別の…そう、男女の愛情に変わりつつ…いや、変わってしまうなんて。



(…どうしよう。こんなのバレたら
気持ち悪いって嫌われるよな)

(いくらセックスしたからって
あいつは俺のこと普通の男友達
としか思っていないだろうし…)

(ああ、やべえ。死にたくなってきた。
こんな事なら女になんてなるんじや
なかった)



：でも、もう男に戻りたくない。

この気持ちをなかつたことになんてしたくないのだ。いや、そもそもこんなこと考えてる時点で今更だ。

グダグダと頭を抱えながら考えているとふと一つの案が頭の隅をよぎった。

「…そうだ。俺が他の女よりも特別だっと思わせれば良いんだ」

何だ簡単なことじゃないか。



「あの、さ。何でこんな事になってるの？僕たち」

「何だよ、せっかく口でしてやろうってのに、嫌なのかよ」

「嫌ってわけじゃないけどさ。僕もう童貞じゃないんだけど…その、いいの？」

ゼッ

アッ



「それは、その…まだ知らない奴とやるのは怖いし、亮相手なら嫌じゃないから…あゝ！もう、変なこと聞くなよな！！」

「ご、ごめん！凜音がいいなら別に構わないんだ」

恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染めながら自分の気持ちを誤魔化すように捲し立て。ぼろが出ないうちに始める。

ビクッ

ドキ
ドキ♡





「あむ、ちゅる...んっ♡じゅる...っ♡
んちゅ♡ちゅろ、ちゅ、ちゅぶ...ちゅ♡」

「ちゅぷ♡...はあ♡はあ♡んくっ♡
じゅる、じゅるるっ♡じゅぷぷっ♡」

じゅる

ちゅる
ちゅる

どろ

（わかってはいたけど、此奴のチンコ
間近で見るとやっぱりデカいな。）

（それに、この味と臭い：♥男の汗臭さと
しょっぱさで美味しくないはずなのに、
もっと欲しくて舌が止まらない）



「はむ、ちゅ♡じゅる…じゅるる♡」

（口いっぱいにも味の味が広がって
咥えてるだけで頭がボーっとしてくる♡）

口で奉仕しているだけのはずなのに
下着は愛液でグショグショになって
しまい。気付けば指が勝手にクリトリス
を弄り始めてしまっていた。



（う、ぐっ！何で舐めながらそんなに切なげな顔で見てるんだよ）

（凜音ってこんなに可愛かったつけ？仕草や雰囲気も最近は、まるで普通の女の子だし）

（あ、いや、今は女の体なのは確か
なんだけど…それでも、これは…）



(……そりゃあ、セックスは気持ち良かったし、シてる最中は特に気にしなかったけど)

(相手はつい数日前まで男で、アホな理由で女になった奴なんだぞっ)

(ああっ！何で僕が凜音のことでこんなにモヤモヤしなくちゃいけないんだよ！)



口の中で血管がビクビクと脈打ち肉棒がひととき大きく膨らむ。亮の限界を感じ取った俺はさらに深くまで咥え込みストロークを速める。

喉の奥に亀頭がぶつかりと嘔吐してしまいそうになるが、亮の気持ちよさそうな顔を見ていると不思議と我慢できた。



「んんっ♡っ♡ん♡んうっ♡むぐうっ♡」

「う、お♡お、おおっ♡口の中で
舌が絡まってっ♡」

「…凜音っ、やばい！僕、もう…でるっ！」

「いいお♡ほおのまま、くひに、らひてえ♡」

「あっ♡ああっ♡でる…っ♡
凜音の口の中に…っ♡」



びゅぶ、びゅぶるるるるっ！

「んぶっ！おっ！うっ！うっ！げほっ！」

亮は腰を突き上げ喉奥に押し付けられるように射精した。勢いよく叩き付けられる精液のあまりの苦しさに吐きそうになるのを耐え、少しでも零したくない気持ちで必死に飲み干していく。



「…っ！」「めん！気持ちよすぎて、つい」

「んぶっ！ん、んっくん、く…ぷはあ
はあ…♡はあ…♡ん、大丈夫♡」

「俺も元男だから気持ちはわかるし
気にしないでいいよ」

「それより…どう、だった？俺、お前
以外の男とこういう事したことない
から…その、あんまり自信ないけど」



「初めてだから他と比べようがないけど…き、気持ちよかったよ、すっごく」

不安げな表情で見上げる俺を亮は顔を真っ赤にし目をそらしながらも褒めてくれる。



自分でも言ったが初めてで、ぎこちないそれがそこまで上手くいったとは思えない。

それでも亮は俺を気遣ってくれる。

そんな優しさに嬉しくなってしまうあたり俺はもう駄目なのだろう。



ベッドの上で服を脱がされ男の時とは
全く違う、傷一つない白い肌を露わに
させられる。

亮にじっと見つめられているだけで
身体が火照り、息が荒くなってしまう。
それを悟られないように腕で顔を隠す。



「いくぞ、入れるからね」

「ん…いいぞ♡」

初めての時よりもはち切れそうなほど
熱く滾る肉棒。

こんなモノが入ってしまったら俺はどう
なってしまうのかと、緊張と期待で心臓が
バクバクと激しく鼓動する。

どっ



「ふ、う…っ♡うう…あ、うつ♡」

秘所に押し当てられた肉棒はゆっくりと
膣肉を掻き分けるように侵入してくる。

お互いの合意の上でのセックスは、最初
よりもより強く亮を意識してしまい。
恥ずかしさで顔が真っ赤になってしまう。



「凜音、何で顔隠してるの？」

「ま…っ！ちよつとまって！いま、
やばいつ！絶対見せられない顔
してるからっ！」

「凜音…顔、見せて。
今の凜音の顔みたい…」

「……っ♡」

んっ♡んっ♡

はぁ♡





「~~~~っ!!う、つくう~~~~っ!!」

男の腕力には勝てず直ぐに腕をどけられ、
蕩け赤く染まった顔を見られる。

俺は発情した雌のような顔を見られた
恥ずかしさで、声にならない声を漏ら
してしまう。

4x 4x

フグッ

んっ っんっ

「ばかつ…！見るなって言っただのに！
うう…っ、こんな顔見られたく
なかったのに…っ」

「えっ、なんで？…その、すごい
可愛いと思うよ」

「はあっ！か、可愛いとかいうな〜！」

…俺は単純なのだろう。ただ可愛いと
言われただけで身体は嬉しさで喜び
震えてしまう。



そんな俺の姿に興奮したのか、亮は腰を強く掴むとより激しく肉棒を打ち付ける。蕩けきった膣内を抉られるたび脳を焼くような快感に包まれ、膣肉は精液を搾り取ろうと蠢きイチモツに絡み付く。





「おっ♡おおあっ♡深いいつ
う、あ♡これ、すごいよお…♡」

「あ、ああっ♡亮のチンコなかで
ビクビクって跳ねて…♡」

んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡

んっ♡んっ♡

肉棒が挟り進むたび中でより硬く
反り返るのが伝わり。痙攣する
ように震える。

「はあっ♡はあっ♡…っ♡凜音の、中
気持ちよすぎてっ…もう、でるっ！
おくに…一番奥に出すからね！」





びゅぶるるるるるっ♡

「ふきゅうっ♡あっ♡ひあっ♡お腹の
おく、だめ…っ♡うきゅっ♡ああっ♡
い、くっ♡イっちゃうっ♡」

絶え間なく来る快感に最早何の抵抗も
出来ず、俺は絶頂を繰り返した。

はぁ♡

ふきゅう♡うきゅ♡

ふきゅう♡うきゅ♡

「亮は「うやっとおっぱいでギュー
ってされるのが好きなんだろ？」

「はあ…んくっ！あ、あっ！凜音っ…！」

「ほら、これはどうだ？えい♡えい♡」
胸の中でビクビクと脈打つ肉棒を
カウパーを潤滑油にし擦り合わせ
刺激する。



「…くっ！凜音のおっぱい柔らかくて
吸い付いてきそうで…っ♡あ、あぁっ♡
腰が、勝手に動くっ…♡」

「おいおい♪だらしない顔しや
がって。俺のおっぱいがそんなに
気持ちいいのかよ♡」

「胸のなかでこんなにバキバキに
して…お前ホント元気だな♡」



「あゝあゝカウパーでおっぱい
ぬちゃぬちゃになっちまったな♡」

「だって、凜音のおっぱい気持ち
いいからっ」

「だからって腰振りすぎだろ♡
チンコ擦れ過ぎておっぱい
火傷しちゃいそうだぞ♡」

はめ♡

ぐんぐん

うんうん♡

あゝ♡
あゝ♡

あゝ♡
あゝ♡



（うわあ♥チンコすげえ熱くて脈打つ
てる♥こんなの挟んでたらこっちまで
エロい気分になって来ちゃう♥）

（どうしようこっちのドキドキ
伝わってないよな？大丈夫だよな？）



谷間に挟まれた肉棒が突き入れられる
たび乳房はグニグニと形を変えながら
それを受け入れる。

まるで体の全部が目の前の男の為だけ
にあるようで、それが俺をひどく興奮
させた。



(ふあっ♡おっぱいチンコでいっぱい
擦られて、なんだか俺まで気持ちよく
なって…っ♡)

(はあ…はあっ♡ま、ずっ…♡
感じすぎて乳首立ってきた♡)

(早くイかせないと先に俺の
方がイっちゃまいそうだった♡)



「ほら、これが良いんだろ♡
ぐに、ぐに、ぐに♡いけ、いけ♡
俺のおっぱいでイっちゃえっ♡」

「…っ、すごい乳圧でっ♡…凜音、僕
もう、でそうっ…!」

「いいぞ♡このまま精子おっぱいの
中に出しちゃえ♡」

「だすよっ!凜音…っ!」

ぐんぐん

Www
Www
Www♡

Ar
Ar

Ah
Ah♡

「んっ…♡」

ビュルビュルと容赦なく吐き出された
精液が濃厚な雄の臭いを染み込ませ
ながら胸いっぱい広がる。

（はあ、ああっ♡亮の精液、おっぱいに
沢山ぶっかけられちゃったあ♡）

びゅん



(すー…お♥おっぱいが亮の精液の
臭いでマーキングされてるみたいだ♥)

(ヤバいな…♥臭いだけでお腹の奥が
疼いちまってる)

(こんなの我慢できるわけないよ…♥)

「お前が激しくするから俺まで火照って
来ちゃったじゃないか♥こんなにした
責任ちゃんと取れよな♥」



「は、あああっ♡ひろ、がつてくうっ…♡
チンコ深く刺さってオマンコ亮の形に
なっていくう♡」

「凜音っ！凜音っ！」

「はあ♡あっ♡ああっ♡これ、すごい♡
ズンズン突き上げられて、子宮降りて
来ちゃってるよっ♡」

どっ

はあ♡

うわっ

110!!

110!!

アッ♡
アッ♡

あああ♡

はあ♡

膣を締め付けながら大胆な腰つきで
上下に動き刺激する。

元男の方が先天性の女よりエロくなつて
しまうと聞いたことがあるがそれは本当
だったのだろう。

何せ俺がそれを直に体験しているの
だから。俺はそれほどまでに淫らに
なってしまったているのだ

どわっ

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん



「はあ♡あ、ああ♡んくうつ♡出たり入ったりしてるとこ見られて恥ずかしいのに気持ちよくて腰止まらないっ♡」

まるで情婦のようにいやらしく腰を振る自分に、男だった時の己はもういないのだと確信するが。亮が相手ならそれでもいいと思えてしまう。



「んっ♡ははっ♡いま、中で精液
ぴゅっぴゅって膈内にお漏らし
しちゃってるぞ♡」

「気が早すぎ♡ほら、
もっと出来るだろ♡」

どっ

はあ♡

んっ♡

ぐわっ

いっ

いっ

あっ
あっ



動きに強弱を付けながらグニグニと刺激すると亮も負けじと激しく突き上げる。俺たちはお互いに競うように快楽を貪り合った。



「ひあっ♡ああっ♡気持ちいいとこ
トントんされながらチンコが膣内
で暴れて…っ♡」

「ああああっ♡奥に響いて…っ♡
んああっ♡へんになるうっ♡」

どっ

はあ♡

うわっ

110!!
110!!

あっ
あっ

はあ♡

はあ♡



「凜音のトロトロまんこすごい絡み
付いてきて…っ！う、くっ！」

「出すぞ凜音っ！お前の子宮に
精液注ぎ込むからな！」

「ふぁ♡あっ♡あぁっ♡うん、だしてっ♡
びゅっびゅっでして一緒にいこう♡」

どっ

はぁ♡

ぐわっ

110ッ

110ッ

アッ
アッ

はぁ♡

はぁ♡



びゅぶ、びゅぶるるるるっ！

「ひあっ♥ああっ♥で、出てるう♥
お腹のなか熱い精液いっぱい
で、タプタプしちゃってる♥」



普段は男の時のようにガサツなのに
一度セックスを始めたら彼女はこ
んなにも乱れる。

他の誰も知らない…見せたくない。
僕だけが知る凜音の女としての顔。

(ああ、そうか。ようやく自覚できた。
僕は凜音のことが好きなんだ)

ビクッ

ウエー

んんん♡

んんんんん



元男相手だからと自分の気持ちに気が付かないように誤魔化していた。

けど好きだって気持ちになったのは
今まで凜音と過ごして来た時間の
積み重ねがあったからだ。

だから今なら自信を持って言える
僕は彼女が好きなんだって。



「…なあ、凜音。もう
こんな関係、終わらせないか？」

「……は？え、あ、何？」

亮のいきなりの言葉に脳が理解する
のを拒み一瞬、体が固まってしまう。

今なんて言った？

この関係を終わらせると言ったのか？



亮に振り向いてもらう為なら、
なんだってやるつもりだった。

俺から身も心も離れさせない為に
普通の女じゃやしない事だって躊躇い
なくするつもりだった。

：それに亮も俺のことを女として
意識してきていると思ってた。

だから想像もしていなかった。
亮にこんな事を言われるなんて…。



「何って……」

「…っ！何でいきなりそんなことっ！俺、何かしちゃったか？もし何か怒らせるようなこととしてたなら直すよ！だから…っ！」

「ち、違うよ！そうじゃないんだ。ごめんな、言い方が悪かった」

「僕はただ、今のハッキリしない関係を終わらせて…普通の恋人になろうって言いたかったんだ」



驚きで呼吸が止まってしまったかと思った。
いま、亮は恋人になりたいと言ったのか？
深く深呼吸をし呼吸を整えようとするが
心臓はバクバクと激しく鼓動しちつとも
いうことを聞いてくれない。

それでも俺は今の言葉が夢ではない
と確認するために恐れ躊躇いながら
も小さな声で問い返した。



「……いい、のか？俺なんかで」

「俺は元男だし、女になった理由も
今思えばアホみたいなものだったし……」

「……うん、知ってる」

「全然、後先考えてなくて行き当たり
ばったり、ばかりだし……」

「何年一緒にいると思ってるんだよ。
そんなの今更だろ」

「このまま、お前と一緒にいたら。
好きだって気持ちを抑えられなくて、
きつと離れられなく——」



「んうっ♡ん…っ♡ふう♡」

続きを口にする前にキスで唇をふさがれる。

フーッ

ちゅっ

ドキ♡
ドキ♡

ムニムニ♡

突然のことに状況を理解できず頭の中が真っ白になってしまう。

「…そんな凜音が良いんだ。そんな凜音を好きになったんだ」



唇が離れ亮の手は優しく頬を撫でてくれる。

お互いから視線を外せられない。

俺は熱病に掛かったように身体をあずけ寄り掛かると、その無防備な唇に再び自分の唇を合わせた。

あ...

ビクッ

ムニャ

「はむっ、んふっ♡……ちゅ、ちゅぷ♡
はあ♡はあ♡んっ♡……熱っ♡舌、火傷
しちゃいそうだ……♡」

（キスってこんなに気持ちいいんだ……♡
う、あ♡やばっ……♡足腰に力が入らなくな
って、何も考えられなくなりそう♡）

ちゅぷ

ビクッ

ムン

んん

フー

舌が少し触れただけで身体は
ビクンツと小さく痙攣し、頬は
熱を持ち息が荒んでしまう。

蕩けている。今の俺は、そう表現する
しかない表情をしているのだろう。

はぁ♡

ハァハァ♡

ビクンツ

ちゅっ

ムンムン♡



「なあ…さっきの好きって、
そう言うこと…だよな？」

「ああ、当たり前だろ。冗談で
こんなこと言わないよ」

「…うん♥わかってる♥
俺も好きだ♥」



「嬉しくて心臓がバクバクいつてるし、頭もお前のことしか考えられないくらい蕩けてる」

「…けど、このまま進んだら俺、本当に戻れない。それでもいいんだな？」

返事は言葉ではなく再びキスで返される。俺を求めてくれる情熱的なキスにどうにかなってしまいそうだった。

ビクッ

ムニャ

「はむ♡ちゅ、ちゅぷ♡はあ♡はあ♡
チューしながらのセックスすげえ♡」

「あむ♡ちゅぶ…ちゆる♡…あはっ♡
上も下も亮のでとろっとろだあ♡」

いつもしている行為のはずなのに、まるで
初めての時のようにドキドキと心臓は
高鳴り、胸は多幸福感に包まれる。

ズビズビ

ふっ

ムハハ

んんんんん

んんん

はあ♡



「ちゅ…じゅる…っ♡ちゅふ♡んっ♡
亮のチンコ膣内でガチガチに膨らんで
ビクンビクンって跳ねてるぞ♡」

「仕方ないじゃないか。凜音がエロすぎる
のが悪い。こんなエロ可愛い子が目の前
にいて我慢できる奴なんていないよ」

ズビ
ズビ



「んふふ♥そのエッチな子をひとり
占めできるのはどんな気分なんだ♥」

「言わなくても分かるだろ？最高だよ。
絶対他の男なんかに触らせてやるもんか」

「…うん♥ずっと亮だけの
モノにして欲しいよ♥」



舌を絡ませお互いの粘膜を絡ませながら
結合部からはいやらしい音と共に愛液が
溢れ出る。

自分の女だと主張するかのような
激しい動きに子宮が疼き熱くなっ
てしまう。





「んっ……んちゅ、ちゅ、ちゅる……っ
ふ、くうっ♡あ、ああ……っ♡敏感な
とこギリギリって……♡」

「チンコ奥まで届いてっ♡あっ♡ああ♡
ふ、あ♡子宮口にキスされてる……っ♡」

ズビ
ズビ

ズビ

ズビ

ズビ

ズビ

はあ♡



お互いが繋がりがり蕩けるような感覚に襲われ、頭の奥が白くチカチカと光る。

俺は雌としての喘ぎ声をあげながら気持ちよさのあまりに、身体を跳ねさせ震えながら潮を吹いてしまう。

ズビズビ

「お、お！中がすごい締め付けてきてっ！
凜音のオマンコほんとにドスケベだな」

「ひあっ♡あ、あうっ♡だってこんな
ズプズプされたら…っ♡ん、ああっ♡」

「おなか、めくれちゃうくらい気持ち
よくて…っ♡ん、ああっ♡」

「なに、これ…っ♡いつもより…お、奥があ
ゴリゴリってええええっ♡ふあっ♡あっ♡
子宮の中まで入っちゃいそうっ♡」

はめっ♡

あああ♡

ハッ
ハッ

ズッ♡ズッ♡

「は、あぁっ♡亮っ、
好き…っ♡大好きい…っ♡」

「もっと壊れちゃいそうなほどいっぱい
に…っ♡俺のオマニコが亮だけのモノ
って、しっかりマーキングしてえ♡」

「ああ、凜音が僕の女だって
しっかり証明してやる！」

ズビズビ

ムハハ

はめっ♡

ムハハ

んっ♡





びゅぶ、びゅぶるるるるっ!

「お、おおおっ♡でてりゅっ♡
濃厚ザーメンお腹の中にビチャ
ビチャかかっている…っ♡」

「あはっ♡子宮口でちんちんとキス
しながら、だされちゃってるっ♡」

子宮の奥に絶え間なく精液を叩き
付けられるたび、身体は何度も跳ね
深く絶頂してしまう。

びゅっ♡びゅっ♡

アハハハ

アハハハ

あああ♡

びゅる
びゅる

「おっぱいでむにむにしながら
こっちも奇麗にしてあげるから♥」

「あっ♥あっ♥凜音っ♥ちよっ…
まって…っ。うぐっ♥こんなの
知らな…っ♥はあっ♥ああっ♥」



「チュツ♥くちゅ♥んっ♥じゅる…ずる♥
ずるるう♥れる、れる♥ちゅるる…っ♥」

お尻の穴にキスをし丁寧に刺激するように
舐め解す。ゆっくりと円を描くようにしな
がら愛撫しヒク付く穴にそっと舌を入れる。



「れろ…れろお♡ぺろ♡…れろ、れろ♡」

「ふあっ♡あっ♡凜音、そこ汚いからっ」

「何言ってるんだよ今更。今まで
だってチンコ舐めてやったら？
どっちもあまり変わらないよ」



(はあっ♥舌でクチュクチュされて
尻穴すげえヒクヒクしてる♥
そんなに気持ちいいんだあ♥)

(こんなおっぱい犯すみたい
に腰ガクガク振っちゃって♥
はは♪なんだか可愛いな♥)

(ああ、どうしよう♥いま、すごく
亮の顔みたいのにもっとお尻
舐めていたくて舌止まらない…っ♥)



「じゅるるっ♡じゅぶ♡ちゅぶ…♡
あむっ♡れろ、れろれろっ…♡」

亮が気持ちよくなってくれるならと、
何の抵抗もなくお尻の穴を舌で愛撫
する。

ああ…亮の何もかもが愛おしくて
たまらない。



「ちゅぷ…ちゅる♡こっやって
ホジホジされるの気持ちいい
だろ♡れるお♡れる…ちゅ♡」

「このまま受け止めてやるから
いつでもびゅっびゅっって
出して良いんだぞ♡」

「く、う♡尻穴ほじられながらおっぱい
で擦られて…っ♡気持ちよすぎて
も、う…っ♡あ、ああ♡やばい、イクっ♡」



肉棒が跳ねると同時に胸の中に溢れるほどの精液が射精される。

「はむっ♡…う、ん…ちゆる、じゆるる♡
すっ♡…♡おっぱい妊娠じちやいそうだ♡」



「あはっ♡こっやって手を繋いで
ると恋人同士だって実感できて
すげえ嬉しいな♡」

愛おしげに絡めた指を動かし、まるで
今ある幸せを噛み締めるように微笑む。
熱い吐息を吐くたび、膣は甘やかに絡み
溶けて一つになる錯覚に陥ってしまい
そうになる。



「亮♡ちゅーしよっ♡」

彼女はそう言うのと優しく唇を重ねる。
肉棒が根元まで包まれる快感に浸り
ながら、舌を絡め唾液を交換し合う。



「ん…ちゅっ♡ちゅぶっ♡
好きだよ亮♡…愛してる♡」

「…っ♡」

耳元で囁かれた魅惑されるような声に
背筋がゾクゾク震え俺はまるで子供の
お漏らしのように彼女の子宮に精液を
注いでしまう。



「…ふふ♡赤ちゃんの名前決めなくちゃいけなくなるかもな♡」

「できてるかな？」

「うん。たぶん、きつと…♡」

胎内に広がる精子を愛おしそうに受け止めながら彼女は幸せそうに僕に微笑みかける。











































































































































































































































































